矢野嶺雄甘泉と老人福祉施設

矢島嗣久

矢野嶺雄は大分県宇佐郡八幡村（現宇佐市）の出身で、曹洞宗の僧侶である。

三十一歳の頃、一念発起して養老事業を志し、托鉢等を行い苦労を重ねた。

大正十四年二月、別府にて養老院を発足させる。これは大分県内では先駆けとなった。

現在は三代目の孫が別府高齢者総合ケアセンター「はるかぜ」を経営している。

一　生い立ち

矢野嶺雄（みねお）は、明治二十七年（一八九四）七月二十八日、大分県宇佐郡八幡村（現宇佐市）下乙女に生まれた。この年の八月一日には日清戦争が始まっている。父は農業の矢野与兵衛、嶺雄は次男として生まれた。母はチズ、国東半島の香々地（現豊後高田市）の農業、淵家の出身である。嶺雄が六歳のとき、母チズが病死した。

生家に隣接して矢野家の菩提寺松月寺があり、ここの住職の田原観嶺（かんれい）和尚のもとで訓育され、呼び名もミネオからレイユウと変えた。幼いながら、母の菩提（ぼだい）を弔い、先祖の供養をするようになっていた。嶺雄は観嶺和尚からの評判もよく、まじめに勤めていた。小学校は慈眼寺という寺子屋風な学校で学んでいる。

二　長崎晧台寺へ

明治四十一年（一九〇四）、嶺雄が十四歳のとき、観嶺和尚は「嶺雄を僧侶として一人前にするには、田舎の小さな寺に埋もれさせてはならない」といい、嶺雄を長崎の晧台（こうたい）寺へ修行僧として入山させた。この寺は禅宗の曹洞宗では、九州の本山ともいえる寺である。

当寺の堂頭は霖玉仙（りんぎょくせん）和尚であった。

嶺雄は人知れず、東司（とうす）（便所）の掃除をかかさず続けたという。

晧台寺の檀家総代の山田家の老夫人からいわれて息子の吉太郎氏から眼をかけていただいていた。山田氏は長崎県の水

産王といわれる多額納税者でもあった。山田丸という持ち船で貿易等の事業をされていた。先代の山田氏は長崎のイギリス商人グラバー氏とも昵懇で、日本名で倉場氏という名前も付けていたという。先代のトーマス・ブレーク・グラバーは坂本龍馬の斡旋で、長州藩に新式の鉄砲や軍艦を売ったことでも有名である。武器の買い手側は長州の井上聞多、のちの井上馨、伊藤俊輔、のちの伊藤博文首相、立ち会いは土佐出身の饅頭屋こと近藤長次郎であった。

三　駒沢大学へ遊学

嶺雄は大正三年（一九一四）、上京を決意して、駒沢大学へ聴講生として入学した。嶺雄が二十才のときである。大学の書記をさせてもらって学費に宛てていた。下宿から約三キロを電車と並んで走っていたと本人が述懐している。在学中に『国訳大蔵経』とか般若心経注解書等を読み、

これが嶺雄の英知の輝きの基となった。

大正八年七月、学業を修めた嶺雄は、長崎の晧台寺の副住職となり、後輩の指導に当たった。その後、三年を経て、大分県宇佐郡長峰村（現宇佐市佐野）の曹洞宗光明寺の二十六代目住職として故郷へ帰り、布教に務めた。

四　老師とともに南中国へ旅行

大正十一年（一九二二）、晧台寺堂頭、霖玉仙師が七十歳の古希を迎えた際、嶺雄が発起人となり、『霖玉仙老師古希寿言集』という詩集を発行した。

翌大正十二年、霖玉仙が曹洞宗御開山の道元禅師ゆかりの中国五山（ござん）へ旅行した際、嶺雄もお伴した。五月十三日「上海丸（しゃんはい）」で出発、翌十四日上海に到着、十七日には仏教の聖地、天童山（てんどうさん）（中国浙江省（せっこう）寧波（ねいは）の東にある太白山の一峰、中国五山の一つ）へ行った。さらに禅門の大道場として栄えた径山（きんざん）寺、また達磨大師の由緒ある鶏鳴寺（中国南京市）と数々の寺院詣でが続けられた。

径山寺は『広辞苑』によれば、中国五山の一つ。浙江省臨安県天目山の北東峰にある。径山（金山）寺味噌としても有名である。

五月二十四日は、上海の料亭で、中国の文人画家、呉昌碩氏と会談、同席した王一亭氏が筆を執った水墨画に呉先生が賛を入れて玉仙老師へ贈られた。

二人の旅行は二十六日に長崎に帰着しているので、二週間にわたる旅であった。この時嶺雄は二十九歳。

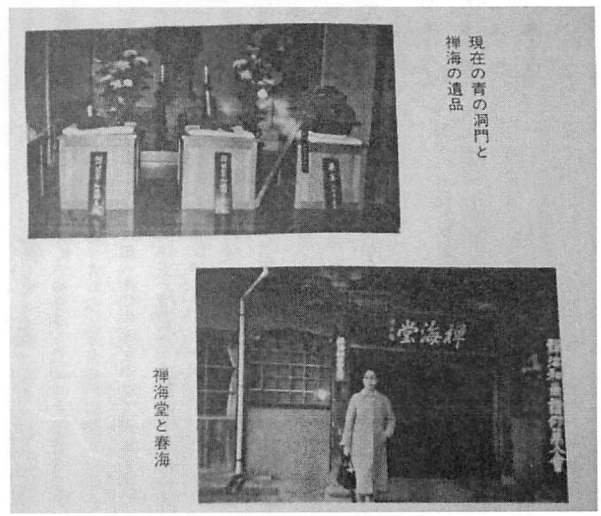
五　岐阜県正眼寺で修行

嶺雄は中国旅行から帰国後まもなく、岐阜県加茂郡伊深村（現美濃加茂市）の正眼寺に入った。ここは日本でも一番厳しい臨済宗の修行道場で、鬼叢林と呼ばれていた。嶺雄は宗派にこだわらず、この寺院に入山したのであった。

この山から修行僧は里へと下って来て、托鉢をしていた。しかし、嶺雄は、この正眼寺にはわずかしか滞在できなかった。長崎の玉仙老師の容態が悪化したとの知らせを受け、やむなく下山せざるを得なかった。玉仙老師は大正十三年五月九日、大往生を遂げられた。

六　発心と動機

嶺雄は、大正十三年（一九二四）三月十一日から大分県耶馬溪（現中津市）の本耶馬溪町跡田、智剛寺で、五日間昼夜二回の説教をすることになった。嶺雄の滞在のために宛てられた客室は、「禅海堂」といわれ、僧堂には禅海和尚の遺品、ノミや槌・鉄鉢などが陳列されていた。鉄鉢とは、僧が信者から、食物をうけとる容器、僧の食器をいう。



現在の青の洞門と禅海の遺品

禅海堂と春海

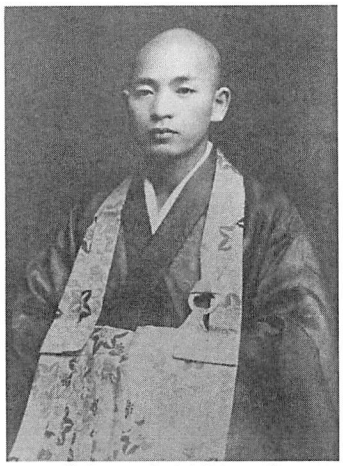
菊池寛の名作『恩讐の彼方』のモデルとして紹介された禅海和尚が、青の洞門を掘ったときに使った遺品である。その際、嶺雄が仏との対話で「養老院を作ること」を決意したのであった。現在も建物の入口の上に「禅海堂　甘泉書」の額が掲げられている。

甘泉とは嶺雄の雅号のことである。

七　養老院の産みの苦労

網代笠と墨染めの法衣の裸一貫の「無」から養老院を作り出すということは、本人が述懐するとおり「猿が望む池の月」だった。まず、住居を定めることが必要だった。温泉のある別府でと探した結果、現在の荘園町の山手、朝日村字原の中で、南山荘園といわれた付近の林のなかにある五百羅漢のお堂の近くの家を借りた。いまの荘園町八組「光の園白菊寮」の付近だった。

大正十三年（一九二四）六月のことであった。野菜を作って老人を一人でも二人でも養う基盤を作ろうと、原野を開拓し始めた。そのとき、速見郡山浦村（現杵築市山香町）役場に農業技手として勤めていた知人の矢野　猛氏が職を投げうって駆けつけてくれた。



苦労して痩せた頃の写真

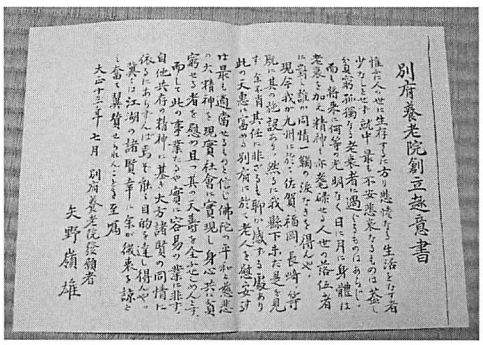
しかし、春の木の芽が吹く頃になったら、森の中の井戸の水が涸れてしまった。その他の条件も良くなかったので、海岸に近い下の方の町へ移転することになった。

嶺雄は養老院経営五十年を振り返って、「これまでずいぶん沢山の人々の御力添えでここまで来られたが、猛氏は私にとって第一番の援助者であり功労者である。済まなかった」と涙ぐんで話していた。

荘園町の山手では温泉も無く、水も春には樹木の根に取られて涸れてしまうありさまであった。

その頃、同門のよしみから北浜の海門禅寺境内の一宇に移転することになった。

大正十三年七月には別府養老院発願者、矢野嶺雄の署名入りの「趣意書」と「別府養老院賛助御芳名録」を県庁や関係役所へ持参していた。翌大正十四年二月二十三日に「大分養老院」の名乗りをあげることになった。すなわち、海門寺で開所式を挙げたのである。後日「別府養老院」と改称されている。



別府養老院創立趣意書

その後、十年を経た後には、「悪罵（あくば）と嘲笑の洗礼が、世間から感謝の代わりに贈られた報酬だった」と報ぜられたほどであった。

八　托鉢と養老婦人会

養老院設立への批判はデマをからめて非難となり、さらに嫌がらせの行動に替わり、身の置き所もない思いであった。

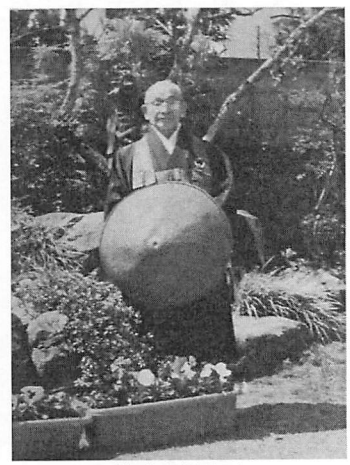
五ヶ月後の七月二十五日、海門寺から二丁ほど離れた北町の山陽館の倉庫を改造して、家賃六円で移り住むことができた。

大正十三年（一九二四）九月に別府町が市制を施行して初代市長に神沢（かんざわ）又一郎氏が就任された。翌大正十四年には市役所内に社会課ができた。それは神沢市長キワ夫人たちの奔走によるお陰でもあった。

神沢キワ様

北町へ移転した七月二十五日には「養老婦人会」が結成された。発会式には市長夫人他十四名が集まり、嶺雄の施設も「別府養老院」と改称された。

嶺雄の大学時代の友人で中内という役僧が北浜の海門寺にいて「矢野は絶対に信頼のできる青年僧である」と推薦してくれた。神沢市長夫人も嶺雄が寄付を強要せず、千枚に及ぶ般若心経の浄書を分かちながら托鉢する姿を知り「お一人で大変でしょう。私達が組織を作ってあげますから、その会員の家々を毎月お回りなさい」と数名の方々とともにボランティア活動をしていただいた。


往時を偲んで

会員からは「五銭会員」「十銭会員」と呼んでいた。また、お米をくださる家には「毎朝のお米を、ひとつまみでも辛抱して缶に貯めてください」と直径十二～十三センチくらいのブリキの容器を養老婦人会が配ってくれていた。

九　富士見に移転

第一回全国養老事業大会が大正十四年十月二十四日から三日間、大阪養老院で開催された。嶺雄は養老婦人会の神沢キ

ワ会長（市長夫人）と武田阪意女史を同伴して出席した。

大会後も大阪、京都の養老院を視察した。帰別後、十二月五日の総会で婦人会が主体となって新舎建設の決議を行った。

翌大正十五年六月には岩尾恒吉市議の家屋寄贈の申し出もあり、冨士見区福永町に用地を確保することができた。

草原の広がる国鉄線路沿いの六十八坪の敷地で八月から着工、十一月十五日に完成した。

七人の収容者とともに引き移って、十一月二十日正午から落成式を開いた。知事（代理）、県議、神沢市長ほか多数の来賓を迎え、市内八十歳以上の高齢者百二十七人を招いて敬老会を開催した。

場所は現在の富士見通りの北側東雲（しのめ）通りの南側、東側は国鉄（現JR）の線路があった。現在は市内のコーヒー会社の用地となり、建物が建っている。養老院は昭和三十九年に西側山手の鶴見町（現在地）へ移転するまでの四十年間をこの地で暮らすことになった。

門を入るとすぐ左手に小さな池があり、その上の大石には、「洗心」という字が彫られていた。石の上には亀の口から水が出ており、亀の背の上には観音像が立っていた。この石は、現在鶴見町の施設の入り口の左手に置かれている。

嶺雄の長男岩雄の妻春海（はるみ）が養老院に来たのは昭和二十四年（一九四九）であった。

十　足　跡

嶺雄は養老院開設以来、協力者への感謝をし、一般への理解を求めて「年報」の発行を続けていた。

昭和二年度（一九二七）の「年報」で、「左官さんとの問答――炊事場修繕料金を支払うにあたり」と題して、養老の道の厳しさを嶺雄は告白している。

左官「請求書は市役所宛てにしましょうか」

矢野嶺雄主事「養老院宛てにしてください。市に請求書を回す必要はありません」

左官「養老院は市の経営でしょう。あなたは市の吏員ではありませんか？」

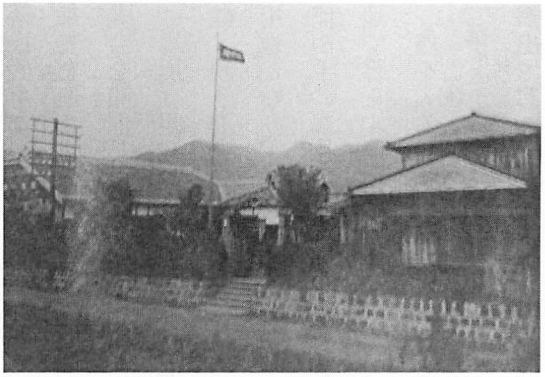
主事「そうではありません」

左官「わたしの近所では、〝市役所の養老院〟といって〝なんぼ月給をもらうだろう〟と話しています」。

主事「約三百人の養老婦人会の方たちが、この家を建て、金やお米を出し合って経営しているのです。私が無報酬

なのは当然ですが、十二人の老人の扶養から炊事・洗たくまで一人で引き受けている宮城みちよさんは無月給です」

左官「それは驚きましたな。私の賃金は寄付します」



昭和三年の頃、別府市内の地位のある人々から「別府に養老院を作ると景色がわるくなる」という言葉の攻撃を受けたことがあった。嶺雄は弁解はせずに、日記に反論の意味の短い文を書き残している。

やがて社会福祉施設の要望が全国的に叫ばれる時流の中で認められ、昭和三年十月に初めての補助金百五十円が県から交付され、さらに十一月十日天皇即位の大礼当日に養老救援の沙汰書が届いた。

嶺雄は元日に斎戒沐浴、数時間かけて紺色の紙に金泥で般若心経を浄写し、十八日に赤坂離宮へ納めた。

昭和五年（一九三〇）二月十一日の紀元節に宮内省から下賜金、内務省の奨励金それぞれ百円に、恩賜財団「慶福会」助成金千円の交付があった。そのため、養老婦人会が別府市松原の松濤館で慈善演芸会を開き、さらに借金に奔走したすえ施設の増築にこぎつけたのであった。

病室、収容室八部屋に医療器具を充足し、建物は七月二十五日に完成。十二月五日に落成式を迎えた。当時の新聞によれば、三百人近くを集め嶺雄が創立からの事業報告を行った。簡素な祝宴の後、墓碑除幕式、院開設以来の十四霊の納骨を済ませた。

創立十年目の昭和九年（一九三四）七月には三期工事として蒸気消毒所が完成し、さらに一年ちかくかけて掘削して温泉の浴室も建て、翌年は病人棟も新築された。昭和二十六年（一九五一）十一月には収容室が増築された。三十年には食堂、炊事場を改築し附属診療所も開設されて、定員六十名の施設となり、五月に落成式を兼ねて創立三十年を祝った。

御影石の門柱には「別府養老院」と彫られ、五段の石段を登ると「洗心」と書かれた大石があり、その付近には石彫りの観世音菩薩が建てられている。

宮内省の下賜金は昭和三十年まで二十五回、そのほか国や県から補助金などの配慮もあった。これらは昭和七年の救護

法の施行からであった。

しかし、院の経営は収容者の増大とともに厳しさを加えた。昭和十二年（一九三七）十一月、嶺雄の緋の法衣や金襴の袈裟を別府市内の各婦人会員に委嘱して「お守り袋」にかえて、三千人の出征将兵の家庭に贈呈してしまった。日本は翌昭和十三年には日中戦争に突入している。

昭和二十一年（一九四六）十月施行の「生活困窮者緊急援護事業法」や「生活保護法」による国の委託業務として職員への給料支給が翌年四月から行われるようになった。さらに二十五年十月、生活保護法の改正や翌年の社会福祉事業法などにより別府養老院も二十七年（一九五二）、社会福祉法人に組織を変え、三十八年八月老人福祉法施行によりようやく老人の楽園へとなってきた。

しかし、嶺雄の托鉢願行（がんぎょう）は十年、二十年と休むこと無く、院開設以来二十四年間の無報酬の中で続けられた。月に四回は日を定めての夜間の托鉢、朝は明けきらぬうちに石垣村まで出かけて、市場に出すために選別したあとのクズ野菜をもらい受けて帰った。

昭和の初年頃の養老院創設前後から、嶺雄に賛同して精神的、物質的に援助をしていただいた方たちの御芳名が彫り込まれた石碑が現在、鶴見町の施設「はるかぜ」の庭に建てられている。

十一　家庭と嶺雄の妻

嶺雄が家庭をもったのは、宇佐郡長峯村光明寺の住職となってから、同郷の下乙女（現宇佐市下乙女）の矢野富子と結ばれた大正八年（一九一九）、二十五歳のときであった。

大正十年六月長女敏子が生まれた。長崎・晧台寺の副住職の任にあったときだったので富子には心細い限りの初産（ういざん）であった。同十四年十月五日の長男岩雄誕生も、その年の二月に海門寺で開院にこぎつけたばかりの時期だっただけに、家庭を顧みる閑がなかった。子どものための乳母車も寄贈の食料の運搬に使う始末だった。

嶺雄が長男との初対面は誕生から十六日後であった。夫妻と二人の子が一つ屋根の下に暮らすようになったのは、富士見町に院舎が完成して一段落した大正十五年のことである。それは富子の両親が養老院の近くに小さな家を建ててくれたものであった。

昭和四年（一九二九）四月、次男文雄が富士見町の家で生まれた。同六年五月、妻富子が風邪をこじらせ肺炎をおこし

て死去した。三人の子は富子の両親にしばらく引き取られて育てられた。

翌七年、稙田村（現大分市）柴崎家からキツ、二十八歳が後添えに迎えられた。

三人の子は素直に育ち、長女敏子は高見家へ養女に行き、長男岩男は予科練から帰り、仏教大学や社会事業の学校へ行き、岩雄、春海夫婦そろって父嶺雄の意志をつぎ、皆で力を合わせた。岩雄は平成二十一年（二〇〇九）に死去している。

食事は入所老人と並んで、矢野一家も毎朝お粥だった。ある日キツが「噛みしめるようなご飯が食べてみたいね」と同意をもとめるように言うと、嶺雄は「お粥をたべていると色が白くなるよ」と答えた。数年ほど経っても相変わらずの粥食。キツは「お粥は色白になると言ったけど白くはならないような」とつぶやきがもれ、キツが嶺雄の言葉を真に受けていたという一幕もあった。

昭和三十年（一九五五）五月に有料老人ホーム「楽天荘」を国鉄線路東側の弓ヶ浜に併設した。重なる過労でキツは体をこわし、四十三年（一九六八）に市内荘園町に居を移すとともに有料老人ホームは閉鎖せざるを得なくなった。市内鉄輪の「海南荘」や明礬の「ゆのはな荘」もできたので、そちらへ移るように利用者へ勧めたが「矢野先生について行きたい」という人々もあった。そのため、荘園町の家を二十人ほどが住めるように改造して矢野一家と一部の老人が移り住むことになった。「楽天荘」と称していたが、嶺雄や妻キツの死後、その建物も老朽化して危険と思われるようになったので、平成十一年（一九九九）に取り壊した。

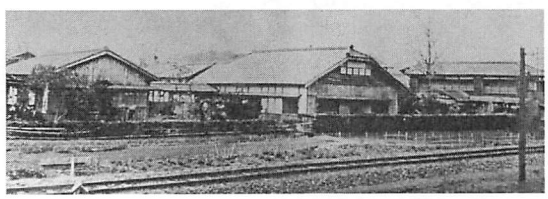
荘園町の矢野邸は現九州大学病院別府先進医療センター（旧温研）の南側道路を隔てた場所にある。

十二　富士見時代の想い出

養老院として当初、昭和の初めから約四十年間を富士見区福永町という所で生活することができた。

昭和八、九年には、鉄道自殺を試みてかなわず、養老院へ連れてこられる人々もあった。

また、シラミやノミの対策にも追われる毎日である。やがて昭和九年（一九三四）七月、温泉の突き湯が着工し、翌昭和十年一月、施設内に浴場が完成した。



十三　インド仏蹟参拝

養老院も創設十周年を迎えた。

昭和十一年（一九三六）の新春、四十一歳の嶺雄は、インドとネパールの仏蹟巡拝の旅に出かけた。

一月十二日、日本を出発、四月四日までの三ケ月間、タイやスリランカ（旧国名セイロン）などに立ち寄って、インドでは二月六日から二十四日間滞在した。旅行のきっかけは、長崎皓台寺の檀家総代の山田吉太郎氏の誘いによるものであり、山田夫人の薦めで高齢の吉太郎氏のお伴役を頼まれたのであった。

旅行の出発時に嶺雄は山田氏から当時最高の写真機と三脚を購入するように言われた。帰国後の写真の出来映えはよくできていて、必ず写真の一部には山田氏と嶺雄が写っている。

後年、昭和四十八年（一九七三）十二月には長男の矢野岩男・春海夫婦もビハール州ブッダガヤに建立された日本寺の落慶法要に全日本仏教会の訪印団メンバーとして参加し、インドからネパールの仏蹟を参拝することができた。

十四　富士見との別れ

当初四人を収容してスタートした富士見の施設も増築などで、人員も増加し、戦後の混乱時には三十人を超えていた。昭和三十年代には定員六十人を上回った。

この頃、横浜市の老人施設で大火があり、大勢が焼死した。その結果、施設は耐火建築でなければと改善が要求されるようになった。富士見の施設も人家が増え、鉄道線路が近くて危険が多いという理由で静かな山手へ移転を定めた。富士見町の土地を売却し、国と県の補助金を受け、市内の鶴見町原の三千百平方メートルの土地に、コンクリートブロック造り延べ千二百平方メートルの建物が昭和三十九年（一九六四）五月落成にこぎつけた。

五月十五日、六十四人の入所者達と鶴見町へ引っ越しをした。その間の四十年間に五百六十六人の方が嶺雄の法衣に抱かれて天寿を全うされている。

十五　鶴見の新時代

昭和三十九年五月、鶴見町の「新世帯」は「別府老人ホーム」と名称も改め、定員八十五名に拡充された。八畳に四人の居室とはいえ、明るくて広々と感じられ、周囲の環境とともに快適なものとなった。前年の三十八年八月の法改正にともない老人福祉対策一元化で、ホームも社会福祉法人「洗心

会」となり、嶺雄を理事長に職員の陣容も次第に整ってきた。

昭和四十一年九月十五日を国民の祝日「敬老の日」に制定された。

四十四年、夏には二年がかりで図書室併設の霊安殿、仏舎利塔を完成させた。

十六　特養「長生園」併設

大正十四年（一九二五）に別府養老院を開設して半世紀、お世話した老人は千百人を超えた。

安定した環境のもとで入所生活も長期にわたり、心身に機能障害が生じ、付きっきりの介護を要する人が増え養護老人ホームでありながら常時介護を要する老人の利用するところの特養化（特別養護老人ホーム化）してきた。

嶺雄はこうした現状を打破するには健康状態に応じて養護と特養に分離するがよいと決意する。昭和五十四年（一九七九）七月から、県下初の併設の施設として、九百二十五平方メートルの敷地内に延べ面積千五百三十平方メートルの特別養護老人ホームを建設することになった。

国や県の補助を受け、日本船舶振興会の助言等により、翌五十五年四月に工費二億円をかけて鉄筋コンクリート造り地下一階、地上四階建ての「長生園」が完成した。

健康を害していた嶺雄も車いすで出席して、四月八日に落成式を行った。

定員五十名の特養（特別養護老人ホーム）の誕生を期に、養護ホームも同年十月に増築され、定員を五十名とした。その際八畳を二人で使用するように改善された。

十七　嶺雄の生きざま

嶺雄は「私の半生の痛ましい涙の底から知り得たわずかなことは、〝人間は最後まで望みと喜びをなくしてはいけない〟ただそれだけのことだった」と大正十三年（一九二四）五月二十四日の日記に記している。

六ヵ月後に一人の老人を引き取って世話を始めた。その翌十四年には養

叙勲の日　勲五等

老院の看板をかかげることになった。

嶺雄は僧侶として昭和二年（一九二七）に曹洞宗本山から社会事業布教師を命ぜられる。

昭和八年十一月別府市に新設された方面委員を委嘱された。それも二十一年に民生委員と改正されたのちも引き受けていた。

嶺雄は昭和十五年（一九四〇）と二十一年にはいずれも厚生大臣表彰を受けた。

三十三年（一九五八）十月には藍綬褒章、四十二年十一月には勲五等瑞宝章、五十六年（一九八〇）三月、嶺雄の死去に伴い従六位追賜を受けた。

昭和四十年（一九六五）四月二十三日には、天皇陛下御主催の赤坂御苑の園遊会に社会事業功労者として全国から夫婦二組の中に嶺雄がキツと共に宮中にお招きを受けている。

十八　〝道〟を極める

嶺雄は教典からの知識、教養を積むなかで、書では〝道〟を極めようと堅い意志を持って精進し、豊道春海、江川碧潭、耆山旭昇、川村驥山など日本で有数な書道家との交流を広げていた。

初め「看箭」と号していた。〝的を見る人〟を「看箭人」というが、若い頃は片肌脱いで巻藁に弓を射る姿をよく見かけた。また、嶺雄が生をうけて朝に夕にのぞんだ八面山には矢柄竹が多く生えて、箭山ともいわれていたので、雅号にしたようである。大正十三年（一九二四）に養老院設立のため別府へ居を定めてから「甘泉」と号している。字体も楷書行書を基本とし、草書体以上にくずすことはあまりなかった。

富士見町に院舎ができたまもなく、昭和になってから嶺雄は日曜日を利用して午前中が小学生、午後が中学生以上を相手に書道塾を開いた。托鉢など善意の施しで頂いた浄財は老人の処遇に宛てるべきだとし、家計やわが子の教育費の捻出のために始めたものであった。塾には大人の方も稽古に参加されていた。

太平洋戦争の学童疎開が決定的となった昭和十九年六月ごろ閉鎖となったが、それまでの二十年間、養老事業に献身できたのも、〝筆一本〟が無報酬の私生活の経費をまかなったからであった。

養老事業達成を念じて決意した般若心経千巻、教育勅語千部の浄書は、托鉢で出会った善意の人々や支援の人などに感謝の返礼として配るためのものだった。

昭和三年（一九二八）十一月十日、今上陛下（昭和天皇）即位大礼奉祝のため献上した「紺紙金泥隷書の般若心経」謹書一巻は百参十号目となったが、鶴見町移転を迎えた三十九年に心経千巻の初志を貫徹したのであった。

嶺雄の能書ぶりをかわれて、いろいろな人から揮毫を頼まれることも多く、耶馬溪（現中津市）の羅漢寺にある禅海和尚の遺品を保存する「禅海堂」の扁額や、宇佐市の名家山口氏宅の門柱の両聯などが残されている。

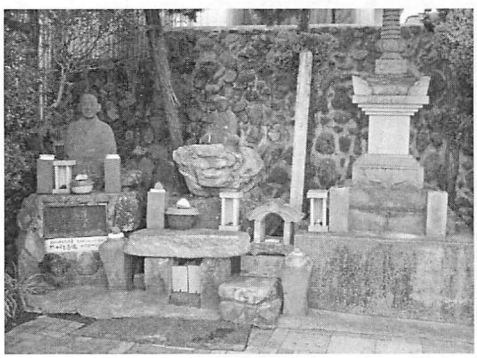
翌昭和四年、別府市から野口墓地の一角の寄贈を受けて、「別府養老院之墓」は嶺雄の筆によるものを初めて石碑に刻んだものである。

彫りやすい書体は評判となり、石屋の依頼が増え、四国の石屋が訪れることもあった。

昭和八年（一九三三）六月二十五日、別府公会堂（現別府市中央公民館）横に除幕された井上馨侯の「千辛万苦の場移転之記」の石碑、十二年十月、九大温研内（現九大別府病院）の「動物慰霊塔」、さらには二十八年十一月野口原に完成した「油屋熊八の碑」等が建てられ、その碑文には昭和二十八年五月、石碑の横には「筆者　矢野甘泉」の署名と「石工　山口喜太郎」の文字が刻まれている。現在「油屋熊八の碑」は別府公園内に移設されている。

荘園町三組に「古戦場小公園」がある。嶺雄が縁あって居を定めることとなった地「石垣原の史跡をだいじに」と、昭和三十年（一九五五）に一念発起し、

石垣原懐古碑



古戦場公園

養老事業の傍ら、十五年がかりで一切を私費によって供養塔や無名の五輪塔などを整備し開園した。

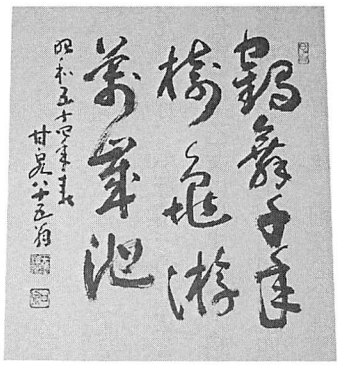
「石垣原古戦場趾」の大自然石の足もとには記念碑がある。碑文には慶長五年（一六〇〇）黒田勢との戦いに敗れて自刃した、大友二十二代義統（よしむね）の武将吉弘嘉兵衛統幸（むねゆき）の辞世の和歌に添えて、「石垣原懐古」と題して甘泉と号し、昭和六年作の漢詩が嶺雄の筆で刻まれている。

嶺雄の趣味は謡曲で、若い頃から観世流を稽古していた。壮年期に入り市内上田の湯町の井本完二先生を師に得てからは本格的に取り組み、観世宗家から「勧進帳」「神歌」「乱曲」「砧（きぬた）」「道成寺」などを伝授されるまでになっていた。

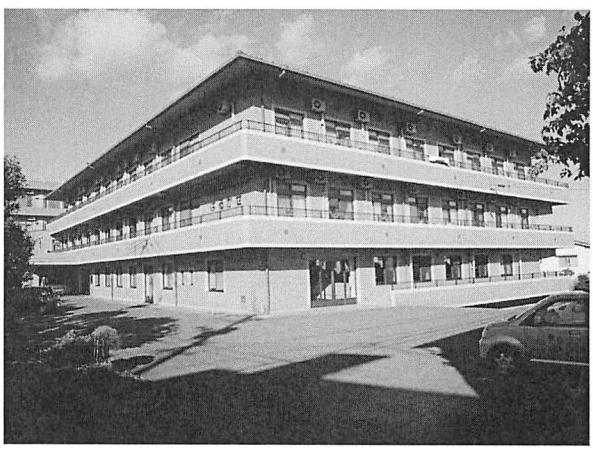
十九　永劫未来への旅立ち

嶺雄は昭和五十六年（一九八一）三月三日、八十六歳八ヵ月の生涯を閉じた。

桃の節句にホームでは嶺雄から孫三男の娘の初節句を祝って贈られたひな檀が飾り付けられ、ひな祭りが始まろうとした矢先であった。



初代別府市長神沢又一郎氏夫人キワさんら数人がさしのべた支援の輪が広がり、大正十四年（一九二五）七月に発足したのが養老婦人会である。婦人会は発足当初六十人の会員も昭和三年（一九二八）百四十七人、五年二百八人、十年には三百二十人と年を追って増え、無報酬二十五年間の嶺雄を物心両面から支えた。



養老婦人会の方々の一部のお名前をここに記します。

武田阪意、平尾トキ子、武田キカ子、永井ウタ子、野上マサメ、岡島仲子、堀トシ子、姫野マツ子、高比良千代子、山田サム子、河村セツ子、藤沢シズ子、藤沢クワ、神沢カズ、戸名房子、姫野キク子、若森栄子、日名子リエ子、宇都宮千

寿子、田中采子、以下省略。

二十　嶺雄の没後以降について

小野春海は昭和四年（一九二九）三月、小野精一の七女として大分県宇佐郡八幡村（現宇佐市）下乙女に生まれた。昭和二十年三月、大分県四日市高等女学校を卒業。昭和二十四年（一九四九）十月、嶺雄の長男、矢野岩雄（前洗心会理事長）と結婚。以後、五十三年間、老人福祉事業に携わる。

昭和五十六年（一九八一）三月、別府老人ホーム施設長に就任。平成十四年（二〇〇二）三月、別府老人ホーム施設長を退任。同年四月、社会福祉法人洗心会理事に就任。

インターネットによれば、現在、施設の法人名は「社会福祉法人　先心会」、所在地は別府市鶴見八組、設置主体は「別府高齢者ケアセンター　はるかぜ」、理事長及び施設長は矢野昌弘氏、昌弘氏は矢野嶺雄の孫にあたる。開設（所）年月日は昭和二十七年（一九五二）五月一日、職員数は九十二名、敷地面積五千九百平方メートル、建物四千三百六十平方メートルである。

取材や校正をお願いした矢野春海さんに紙上をお借りして御礼申し上げます。

引用参考資料

『黙々茨道譚』昭和六十年二月　矢野春海著
『昔のことども　～懐旧録～』二〇〇九年十一月　矢野春海著
インターネット「はるかぜ」
「大別府人物史」昭和十年八月　温泉タイムス社　網仲幸義著